

(2024年4月25日)

## ○ 広島市職員の中央図書館移転問題の告発文書 (\*リンク参照) **を紐解く**

広島市立中央図書館は3月に2024年度予算が成立し、エールエールA館移転に伴う改修工事を9月頃に着手し、2026年度当初の開館を予定している。

手続き等は手順に沿って着々と進めているように見えるが、市の第3セクター救済が主目的という明らかに誤った事業を市民に対してごまかしながら進めている市政を見逃すことはできない。2022年3月の市議会において全会一致で可決された丁寧な検討と説明を求める付帯決議も履行されていない。

2022年3月に「中央図書館移転計画を考える市役所本庁職員有志」による告発文書が報道機関や移転反対グループに届けられた。私の手元にもあるので、ここで遅ればせながら、一広島市民として告発文書を考察してみたい。

### 1. 告発文書の骨子と狙い

骨子は、広島市が広島駅前エールエールA館に中央図書館移転計画を強行する主な背景とその問題点を取り上げている。

**強行する背景**として、以下4点を掲げている。

- ① 市の第3セクター「広島駅南口開発株式会社」が運営するエールエールA館の経営テコ入れが急務であること
- ② 経済界等から中央図書館は地味で暗いとの不満があり、代わりに興行収益のある華やかな音楽・芸術ホール設置の声が強いこと
- ③ サッカースタジアム建設に伴い、中央公園の建築物の建ぺい率が法的基準を超えるため、既存建築物のどれかを公園外に出す必要性に迫られていること
- ④ 築48年の中央図書館は老朽化が進み、近い将来抜本的な整備が避けられないこと

**問題点**としては、以下の通りである。

- ・中央図書館は文教・生涯学習の象徴的な施設であり、新築・移転に際しては市民によくわかる形で検証・総括・提言が必要不可欠にもかかわらず、教育委員会・市民局・図書館職員・有識者などによる検証・総括が行われていない。
- ・中央図書館移転計画は中央公園内公共施設7か所の再配置計画の一環であり、中央図書館と音楽・芸術ホール新設は「コインの裏表」にもかかわらず、市当局は中央図書館移転後の跡地利用案をひた隠しにしている。
- ・都心部に立地する中央図書館は市民に高く評価されているにもかかわらず、現地建替えについて市民局・都市整備局で検討した形跡が窺えない。
- ・市当局は有識者などで構成する図書館協議会を移転計画策定前に開催していないし、市議会においても都市活性化対策特別委員会だけで審議し、大半の議員は蚊帳の外に置かれていた。

**告発文書の狙い**は、市民の移転反対運動を後押しし、マスコミ等に大きく取り上げられ、市の移転計画をとん挫させることにある。

### 2. 告発文書の検証

- ・強行する背景の①は、2021年3月に第3セクターを経営支援するため、広島市は銀行の融資に対する184億円の損失補償及び貸付金利息6億6千万円の放棄、貸付金利息の大幅下げ(1%→0.1%)を行っている。

この時点では、市財政からの安定的な巨額テナント代を見込んでいたが、先行きが見通せないためか、現在はフロア取得に切り替えている。2022年12月の3案比較の時点ではA館への移転整備費を約100億円としていたが、現時点では131億円+α(残床の賃貸料)と増額している。現地建替え案(仮設なし)の約113億円をはるかにオーバーし、今後も増え続けるだろう。

- ・強行する背景の②は、2013年に策定された旧市民球場跡地活用方針において東側の文化・芸術エリアに市民からの要望が強い音楽・芸術ホールを想定していた。後に完成したひろしまゲートパークプラザからは外れたので、中央図書館移転の跡地に期待が集まる。

なお、中央図書館は経済的な収益を生まないのでは、経済界等から疎まれていくという話はあまりに低次元でお粗末すぎる。賑わいばかりを追い求めて薄っぺらなまちづくりをするようでは広島に未来はない。

もう少し文化の香りのするまちになって欲しいし、平和と文化は一体のものである。図書館は文化の育成を図る上で中核をなす施設であり、それをないがしろにするようでは国際平和文化都市の名が廃る。

- ・強行する背景の③は、2021年12月に広島市公園条例を改正して中央公園の運動施設などの建ぺい率上限10%を13%に引き上げたので、早急に青少年センターを解体したり、中央図書館を移転させる必要はなくなっていた。しかし、市は公園条例の改正を公表しなかったため、当時は市の職員を含め多くの人が建ぺい率オーバーを危惧していた。

公園条例改正時の市の隠ぺい体質と中央図書館移転計画の進め方は根っこに共通するものを感じる。それは行政サイドの後ろめたさである。

- ・強行する背景の④は、経年劣化と耐震性不足のため建て替え時期が迫っているのは事実だが、ここ1・2年という差し迫ったものではなく、やはりエールエールA館移転のタイミングに合わせたかったのであろう。

3案のケーススタディの段階で、中央公園内の移転先として市民ファミリープールが候補に挙げたが、この時も2026年まで運営会社と契約しているという理由で候補から外し、結局公園内移転の検討を削除した。中央図書館としては2027年以降の工事着工でも何ら問題はないのに、エールエールA館移転のタイミングに合わせることを判断基準として、エールエールA館移転ありきの第3セクター救済のために決定したことを裏付けるものである。

- ・指摘された問題点の方は、どれも市内部の事情であり、身近な市の職員が一番その実情を把握しているので、信ぴょう性は高いものと思う。要は、市民にはできるだけ内密に、市内部でも関係者だけで処理しようとした後ろめたさがあったからである。

市民のための行政ではなく、市のOB組織を守るために市長及び一部の上層部が企てた醜い行為であり、[広島市職員倫理条例](#)（\*リンク参照）に背く行為である。

### 3. 移転反対などの動き

市当局の都合により、理不尽なことを強行していることに対して内部職員が問題を提起し、2022年3月に報道機関や反対運動をしている市民グループに匿名で告発文書を送付した。それが功を奏してか、市民の反対運動も盛り上がり、市議会でも紛糾して2022年3月に市の対応を厳しく問う付帯決議が全会一致で可決される。

それを受けて、中国新聞の社説にも「最初から議論やり直せ」というタイトルで「三セク救済のための図書館移転だとしたら、本末転倒も甚だしい。そうでないというなら、市は、A館を選んだ理由や経緯を説明すべきである。」と厳しい口調で市政を叱責している。

市民の反対運動の動きは、映像文化ライブラリー、こども図書館と一緒に中央図書館をエールエールA館に移転させるという話が2021年11月に公表されるや否や、各方面のグループから反旗が上がる。特に市議会の付帯決議がなされてからは、若手グループも積極的に加わり、新聞紙上などマスコミを賑わす。

その結果、2022年9月にこども図書館は現在地に残すことになり、今年に入って中央図書館所蔵の浅野文庫と広島ゆかりの文学資料は別地に新たな図書館を建設することになる。

映像文化ライブラリーはまだエールエールA館に移転することになっているが、階高（約5m）の制約があり、求められる機能が十分に発揮できないし、上映ホール内に位置する2本の柱を抜くため構造的にも問題があるので、実現できるか否か疑問が残る。

無理やり集約しようとしたのは、公共施設最適化事業債という国からの地方交付金が目当てであり、当初の一括移転計画からの離脱が目立つのは中央図書館のあるべき姿について事前の十分な検討がされていなかった証である。

### 4. 現在の状況

中央図書館移転改修工事の実施設計に対する技術協力業務と改修工事について、今年1月に公募型プロポーザルでゼネコンの大林・広成JVを決定。3月末までに技術協力業務を終え、9月頃改修工事に着手する予定となっている。実施設計は安井建築設計事務所が実施しており、なぜ今更技術協力業務が必要だったか理解に苦しむが、先行させて工事の準備をさせる狙いがあるのだろうか？現時点で、実施設計が公表されていないのも不可解である。

### 5. 総括

広島市職員の内部告発を多くの市民の目に届け、理不尽な市の行為に警鐘を鳴らしたい。

\* **市職員の中央図書館移転問題に対する告発文書**（2022年3月）：[kokuhatubun.pdf \(fc2.com\)](#)